

【書評】
藤原瑠美著

『ニルスの国の認知症ケア』

大熊一夫



おおくまかずお ● ジャーナリスト。
元朝日新聞編集委員。記者時代に「ルポ・精神病棟」で日本社会に一撃を与える。第1回バザリア賞を受賞。「精神病院を捨てたイタリヤ」捨てない日本」岩波 ほか著書多数。

歩き考えて掴んだスウェーデンの高齢者介護の本質

ジャーナリストにはプロもアマもないということを、この一冊は教えてくれる。

本の奥付によれば、著者の藤原さんは宝飾の名店・銀座和光に三三年勤めたのちに、一念発起して、ジャーナリストの道に飛び込んだ。その心意気に感服して読み始めて、さらに唸ってしまった。

認知症の人々が精神病院で縛られたり閉じ込められたりするのが当たり前の日本社会に気付いた藤原さんは、世界一の精神病院密集地帯として名高い東京・八王子で突入取材を敢行する。

その一方で、縛る・閉じ込めるといふ日本とは対照的な平

買ひ換えたり取り替えたりができないから、壊れたまま騙しだまし使って人生を全うするしかない。

では私たち日本人は、脳ミソに大きな不具合を起した時、何処で人生の最期を送ることになるのか。

脳の不具合は確実に進行する。当然、家族だけでは介護の辛苦に耐えられなくなる。スウェーデンならプロの介護職員が本人を支えるので、独り暮らしの認知症の人も自宅に住み続けることができる。でも……日本社会には、そんな社会的支援システムは根付いていない。先進国の全てが精神病院収容主義の失敗を悔い改めて、エスプロ市のような「普通の暮らしを壊さない」方向に向かっていくというのに、日本だけが収容主義にしがみついたままなのだ。あなたの老後は不安だらけ、と断言せざるを得ない。

私は四三年前に精神病院の「不潔部屋」を見てからというもの、老いた高齢者たちの行く末が心配になって、精神病院の亜流ともいべき老人病院や老人ホームを取材した。

一九八七年に神奈川県平泉の老人病院に狙いを付け、八カ月かけて全二一九人の入院者のどのくらいが身体的自由を奪われているかを調べた。四分の一ほどが連日一二時間もベッドに縛り付けられていた。二六人が畳部屋に閉じ込められていた。四〇人が強い抗精神病薬のセレンセスなどで行動を抑制されていた。

一九九三年、埼玉県のカネ持ち相手の有料老人ホームを取材した。一つのフロアで五分の一ほどが連日一五時間もベッドに縛り付けられていた。二〇〇〇年には同じく埼玉県

和な老後を保障する秘策がスウェーデンの田舎町エスロプ市にあるとわかれると、貯金をはたいて八回も通って、現地の人々の懐に飛び込み、ケアの核心部分をえぐりだして日本人の私たちの鼻づらに突きつける。

私は一九七〇年にアルコール依存症を装って都内の精神病院にもぐりこみ、鉄格子のあちら側の世界を「ルポ・精神病棟」として朝日新聞に連載した。ぶち込まれた独房の近くに「不潔部屋」という無礼千万な表札の檻があつて、認知症の人々が幽閉されていた。日本では、老いて家族の手に余る状態が高じると、行き着く先は精神病院の閉鎖病棟の中に設えられた檻なのだ、とこの時に思い知った。

あれから四三年がたつて、藤原さんより十歳年上の私は、後期高齢者になってしまった。わが頭脳はとみに衰えて、いまや危険水域に入った。だが、日本人の私は安心して認知症になれそうにない。日本の精神病棟は三〇万床以上と世界でも並外れて多く、世界の失笑を買っているのだが、実にその五分の一ほどが認知症で占められるまでになってしまった。こんな日本社会に覚醒の一撃を浴びせなければと考えた藤原さんは、エスプロ市にほど近いルンド市にあるサンクト・ラーズ精神病院に、かつては認知症のお年寄りがかき集められていたことを、突き止めた。

おそらく世界の先進国のどこでも、一九八〇年代の前半までは、認知症を「脳の病氣」と考えて、重い人々は精神病院に送られていた。認知症は、たとえて言えば、微細な電子回路に不具合が生じたパソコンのようなもの。でも、脳みそは

の精神病院で、認知症の高齢者が犬のように紐で壁につながれている姿が、久米宏の夜の報道番組で映し出された。二〇〇七年には、千葉県の無届介護施設で入居者がベッドの鉄パイプに手錠で繋がれている姿が、毎日新聞で報じられた。(詳しくは、岩波書店刊「ケアの思想と実践」の二巻目「ケアすること」の中に、「縛り放題！閉じ込め放題！ああ懲りないニッポン」をご参照ください)

こんな「懲りないニッポン」の性根、どうしたら叩き直せるのか。

ここから脱出するノウハウが藤原さんの本にゼーンぶ書いてある。「高齢者福祉は人手だろ。金がかかるんだろ」とワケ知り顔で言う人が大勢いる。しかし実は違う。認知症が進んでしまふまで放っておいて、「重くなつた」といっては精神病棟や老人病院や老人ホームの牢屋的空間に閉じ込める方が高つく。これは世界の常識である。

日本を席卷している牢屋方式に不安を覚えた人は、是非、本書を手にしたきたい。藤原さんは、私もあやかりたい記者センスの持ち主だ。取材相手から蛇蝎のごとく嫌われる執念深さこそジャーナリストの大事な資質だが、その点、元銀座和光の部長さんは、笑顔でそれを乗り越えている。間違ひなくホンマモンのジャーナリストである。(ジャーナリスト)

本著は、今年度「日本医学ジャーナリスト協会賞 優秀賞」を受賞されました。おめでとうございます。